様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２７０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１７９３

研究課題名（和文）武家華族の資産形成と投資の性格―旧加賀藩関係華族を中心に―

研究課題名（英文）On the character of asset formation and investment of peers descended from samurai in Japan

研究代表者
松村　敏（MATSUMURA, Satoshi）

神奈川大学・経済学部・教授

研究者番号：６０１７３８７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：加賀前田家・加賀横山家・長州毛利家を中心に、明治期から昭和戦前期を対象として、一次史料の収集とそれに基づいた分析を行った。研究結果を一言でいえば、同じく旧大藩大名華族でも、毛利と前田はまったく異なる性格を有していた。そしてそれは両家とも、前近代以来有していた性格であった。他方、横山家は旧大名ではなかったため、これまた前田や毛利などとはまったく異なった性格を有していた。すなわち制約が少なく、自由な企業家活動が可能であり、企業家精神旺盛な同家は、武家華族としてはきわめて珍しいリスクをとった事業展開をみせた。また華族が昭和金融恐慌で大打撃を被ったという通説はでたらめであることなどもわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
(1)近代日本の経済発展とりわけ地域経済にとって、大名華族のあり方は、かなり重要であった。しかもそのあり方は各家の数百年におよぶ歴史がその背景にあった。近現代の地域経済や各地の産業・教育などのあり方を理解するには、旧大名らの戦国時代以来の歴史についての理解が重要になる場合が少なくない
(2)歴史の展開には必然もあろうが、偶然もある。マルクス史観をはじめとして歴史の必然が強調されることが多いが、もし（家臣団を含めた）毛利家の、前田家との好対照の、家臣らに対する藩主の相対的な弱さ、リスクをいとわない体質などがなければ、幕末維新期さらには日本の近代は、相当様相が異なったはずである。

研究成果の概要（英文）：We investigated the asset formation of the Marquis Mayedas, the Duke Mohris, and the Baron Yokoyamas from the Meiji Era to the prewar Showa Era. The research result is that each of those had different character, according to their history. The Mohris was a large clan daimyo same as the Mayedas, but they had the different risk and return preference since early times. The Baron Yokoyamas had also the different character from the Mayedas and the Mohris. The Yokoyamas had shown the aggressive entrepreneurial activity because it was not a daimyo but a chief retainer so it had a high degree of freedom of business and it also had highly enterpreneurship. Furthermore, we also showed that it was completely incorrect that many peers were hard hit by Showa Financial Collapse.

研究分野：日本経済史

キーワード：大名華族　資産家　大藩家老　資産運用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

筆者は，以前から，石川県や金沢市をフィールドとした近代における地域経済史や旧加賀藩関係士族の経済史的研究を進めてきた。また同藩関係の華族の資産形成などについても，関心を抱いていた。しかし華族については，長い間，史料的制約が大きく，家政史料の閲覧が困難であった。　ところが，近年，横山家の近世を中心とした史料整理が，御当主の協力と現地の近世史研究者たちの努力によって進展し，近世文書については史料目録も完成した。これに付随して，近代史料もある程度整理することとなり，筆者もそれに参加して整理作業を担うとともに，史料の写真撮影や研究への利用についても，御当主の許可を得ることができた。

これによって横山家研究に着手したが，分析を進める中で，同家の事業活動等を理解するためには，旧主前田家の動向を把握することが不可欠のように思えてきた。そこで，穴水町歴史民俗資料館寄託の長家史料や，金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫架蔵の前田家関係史料を探索するとともに，公益財団法人前田育徳会が所蔵する前田家の家政史料の閲覧許可を得ることができた。前田育徳会では，近代史料は未整理などの理由により，長い間，閲覧不可であったが，近年整理が進み，また御当主らの御理解もあって，おそらく筆者が近代史料の最初の本格的な閲覧者になっているはずである。したがって，研究上の最も大きなハードルである基本史料の入手の目途はたち，研究準備は十分できていた。

２．研究の目的

本研究は，近代における主に旧加賀藩関係の武家華族について，その資産形成過程と，投資の性格を明らかにすることが目的であった。

加賀藩は近世最大の大藩であり，旧藩主前田侯爵家は近代日本有数の大資産家に成長した。また 3 万石の有力家老であり 1900 年に男爵になった横山家は，明治期に鉱山開発に成功し，従来の研究では，大正期頃にはこれまた大藩大名華族並みの大資産家に成長したとされる（千田，1986）。本研究は，前田家と横山家を中心に，近代の成長過程を実証的に分析し、それにより，近代華族とくに武家華族による投資のあり方や資産家としての性格を解明することで，これまで「資本」という視点でしか分析されなかった武家華族による経済行動の歴史的性格，その非華族資産家との相違，いいかえれば「皇室の藩屏」たる華族資産家とは何かについて見直し，近代天皇制国家の理解に示唆を提供することをめざした。

３．研究の方法

前田家については，会計帳簿の分析により，資産額とその内容の推移，収支の動向をまず分析した。また投資の意思決定過程を，評議会関係史料，日記類により解明することをめざした。さらに会計帳簿により，北海道農場・深川農場の収益と農場経営の性格を推定し、あまり利益を得ていない可能性があり，そこから経営の性格が推定しうると予想した。また寄

付の性格，一族・親戚等への援助の規模と内容を分析し，有栖川宮家・近衛家・二条家当主らの政治活動との関連を検討することとした。日清・日露戦など戦争期については，とくに戦争と前田家の経済行動の具体的な関係を明らかにすることが重要とみなした。

横山家については，断片的な財務関係史料から可能な限り，収益の動向を復元し，収益が他鉱山買収その他の設備投資，株式・債券・土地への投資等にどのように振り向けられていたのかを分析することをめざした。また鉱山その他の事業への展開，その際の経営陣のあり方を解明し，旧家老らがどの程度直接に経営の采配を振るっていたのか否かを確認する。

４．研究成果　2019 年末頃まで、順調に前田家・横山家の史料分析を進めていたところで、コロナ騒動が発生し、前田家の主要史料を所有している前田育徳会の閲覧が 2 年近く停止された。この機に、以前から前田との比較で関心をいだき、史料を若干収集していた長州毛利家の分析を本格的に開始した。それまで前田家の分析をある程度実施していたため、前田との比較で毛利家の独特の性格が次々に明らかになり、また前田の特徴も浮き彫りになった。思わぬ方向で研究が著しく進展したのである。　要するに、近代の武家華族の経済行動は、各家の前近代における歴史と密接に関連し、また近代の家風は場合によっては 16 世紀以来の伝統をもっている場合もあることが、明らかになった。各家の歴史はそれぞれ異なる。したがって近代の華族のあり方・行動も、その長い歴史を背負っていたから、それぞれ皆異なるという豊かな個性を有していたことがわかった。典型などというものはないのである。各家とも個性的な長い歴史をもつという点が、ふつうの家と異なる。従来のマルクス史観による「華族資本」研究は、江戸時代までは封建領主、明治期以降になると資本主義社会の中で自己増殖的に資産を増やしていく資本という先入観のもとで行われきたが、これらの研究では前近代との関連性・連続性という問題意識を生じさせることもなく、武家華族がもつ豊かな歴史的個性を消し去って、貧弱な華族資産家像しか生み出すことはなかった。さらに大正・昭和戦前期についても、毛利・前田ほかの有力大名華族などの史料分析により、昭和金融恐慌によって華族が大打撃を受けたという従来の通説はまったくの誤りであったことが判明した。むしろ昭和恐慌の方が有力華族への影響は大きかった。さらに毛利家などにとってもっと資産を減少させる大きな要因となったのは、相続税であった。とりわけ昭和戦時期になると税率が大幅に引き上げられ、巨額の納税をよぎなくされ、それは経済恐慌による打撃をはるかに上回るものであったことが判明した。　また有力大名華族は土地投資をそれほど行わず、資産の大半は有価証券であったというイメージがあったが、じつは大正期以降東京近辺の地価が上昇して、前田家や肥前鍋島家などはそれによって資産の時価額を急増させた。昭和戦前期の有力大名華族は、都市地主華族だった。　横山家については、2022 年初め頃からあらたに主として明治期の大量の史料が利用可能となり、それを含めて分析した結果、従来の想定よりはるかに早期から広範囲の鉱区の開発に着手していたことや、当主隆平は、金沢の座敷から指揮していたのではなく、自ら鉱山のある尾小屋村に寄留して陣頭指揮をとっていたことなどがわかった。従来横山隆興の伝記などから、実際に現地

で鉱山開発の指揮を執っていたのは、隆興と想定されていたが、じつは旧3万石家老自身だったのである。横山家は万石級武家華族としてはきわめて珍しい企業家であり、たまたま旧3万石家老だったともいえる。そして横山一族からは近代に顕著な活躍をする実業家が輩出した。従来捕鯨業で成功した横山一平が知られていたが、神戸を拠点として台湾・朝鮮・満州に支店を設置して活動した西洋家具・西洋雑貨商横山隆一家や、さらにそこから分かれた京都横山家の存在があらたに判明した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松村　敏	４．巻 58巻1号
２．論文標題 大正・昭和戦前期における毛利公爵家資産の性格変容ー日本における「日の名残り」ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 商経論叢（神奈川大学）	６．最初と最後の頁 27-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村　敏	４．巻 57巻4号
２．論文標題 ［シンポジウム報告記録］武家華族資産家の歴史的個性―近代と前近代の連続性・関連性についてー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 「商経論叢」（神奈川大学）	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松村　敏	４．巻 57巻1・2合併号
２．論文標題 明治期における旧長州藩主毛利家資産の由来と性格―加賀前田家との比較でー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 商経論叢（神奈川大学）	６．最初と最後の頁 1-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 松村　敏
２．発表標題 大正・昭和戦前期における毛利公爵家資産の性格変容ー日本における「日の名残り」ー
３．学会等名 社会経済史学会第91回全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 松村　敏
２．発表標題 武家華族資産家の歴史的個性―近代と前近代の連続性・関連性についてー
３．学会等名 シンポジウム「大名華族家と地域社会」（主催加賀藩研究ネットワークなど　於金沢大学サテライトプラザ）
４．発表年 2022年

１．発表者名 松村　敏
２．発表標題 明治期における旧長州藩主毛利家資産の由来と性格―加賀前田家との比較でー
３．学会等名 社会経済史学会第90回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松村　敏
２．発表標題 明治後期における前田侯爵家の資産と経済行動 ―「皇室の藩屏」たる大華族―
３．学会等名 社会経済史学会第88回全国大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小松市	４．発行年 2023年
２．出版社 北國新聞社	５．総ページ数 780
３．書名 新修小松市史　通史編Ⅱ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関